
眼鏡ポーンな話

愁水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眼鏡ポーンな話

【Nコード】

N9665Y

【作者名】

愁水

【あらすじ】

調子にのってダンナシリーズ第二弾です。相変わらずそんな扱いのダンナと、ゴジラな妻。

皆様、ご存じですか？
眼鏡つて、飛ぶんですよ。

ある休みの日。

理由なんて忘れてしまうほど、きつかけはほんの些細なこと。私はダンナと口喧嘩をしていた。いや、口喧嘩とも呼べない。私が一方的に、ダンナに文句を言っていたのだった。

ダンナ「よくそんなにぼんぼん言葉が出るね〜」

呑気な笑顔でそう返すダンナ。……この余裕。

ウチのダンナは普段、全くと言っていいほど怒らないのだ。どんなにチョップされたり噛まれたり飛び蹴りされても、怒鳴ったり手を上げることは勿論ない。？ゴジラ？と呼ばれたことはあったが、所詮、男からみたら私など特撮の怪獣どまりなのか。

私「〜〜バカにすんじゃにゃーい！！」

私は右手で、思い切りスマッシュをした。そしたらなんと。

バコーーン！！

……ダンナの左頬に、それは見事に入ってしまったのだ。

そこから先は、まるでスローモーションのようだった。

狐を描くようにダンナの顔から吹っ飛んだ眼鏡は、舞うようにそのボディを回転させ、

カシャーン……。

フローリングの床に落ちた。

私(……ヤ……ヤバイっ……!!)

さすがに私は動揺した。

幸運なことにレンズは割れはしなかったのだが、それでも私だっただら確実に怒る。怒るところではない、怪獣大戦争が始まるだろう。

私(ど……どうしょ、怒られる……)

いつもマシンガンのようにダンナに文句を言ってるわりに、相手から怒られることに対して免疫がない私。自分勝手すぎる私……。本当に、この時ばかりはかなりあせったのをよく覚えている。しかし、ダンナのとった行動は。

何事もなかったかのように、床に転がっていた眼鏡を装着し、テレビを見始めたのだ。

私(……。……? っ!?)

ダンナの顔は無表情。……いつもと変わらない、淡白な顔である。……怒って、いない、……のか? 読めない。

ダンナ「……フフーン、フフーン」

何故、鼻歌。

私は堪らず、聞いてみた。

私「……怒ってないの？」

ダンナ「え？　なんで？」

私「え……、だって、ひっぱたいた上に、眼鏡が……」

ダンナ「眼鏡？　うん、壊れてないよ」

私「……怒んないの？」

ダンナ「なんで怒るの？　俺、怒ってないよ？　なんにも」

私「……」

……何に対して怒るのか、全くわからないようなダンナの受け答え。
え。

普通怒るよね？　え、怒んないの？　私だったら絶対怒るけど……

……え、私がオカシイの？

……例えていうなら、彼は心停音のような感情。逆に？　山のよう
な天気？とダンナに言われるように、私の感情の起伏は激しい。

ズレ？　これは感情のズレなのか？

未だに、彼の怒りのリミッターが全くわかりません。

なので、先程聞きましたよ、本人に。

私「私に悪口とか文句言われたりするのに、何で怒らないの？」

ダンナ「流してるから」

……流せるんだ、あんなボロクソ言われて。

私「じゃあ私が何したら怒るの？」

ダンナ「KARRAのことバカにしたら」

……。
……。

そっ、とおでこを撫でてやった。
……なんかベトベトした……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9665y/>

眼鏡ポーンな話

2011年11月29日00時58分発行